施肥体系の改善による
輸出用水稲「日本晴」の収量向上

東近江農業普及指導センター

【普及活動のねらい】

JA 滋賀蒲生町管内では新市場開拓用米として輸出用米に取り組まれており、水田農業の主要な戦略作物の1つとなっています。輸出用米は主に「日本晴」で、通常作と麦跡の作型で生産されていますが、収量については通常作（約 480kg/10a）、麦跡（約 450kg/10a）ともに基準単収（537kg/10a）よりも低く、その改善が課題となっていました。そこで、輸出用「日本晴」の収量向上を目的に、施肥改善の支援を行いました。

【普及活動の内容】

輸出用「日本晴」は通常作、麦跡とも中晩生用の基肥一発肥料体系で栽培されています。通常作では、夏季の高温の影響で肥効が早まり、登熟期間が肥料不足となっていると考えられることから、基肥一発肥料＋穂肥の施用を提案しました。麦跡では基肥重点施肥で生育量を確保する必要があり、中晩生用の基肥一発肥料では初期生育の肥効が少ないと考えられたため、早生用基肥一発肥料の施用を提案しました。

写真1 モデル農家と実証ほの生育状況について検討

今年度は JA と連携し、通常作、麦跡ともに2か所ずつモデル農家を選定して実証ほを設置し、農家とともに生育を確認しながらその効果を検証しました。また、この施肥改善の取組について研修会を実施し輸出用米取組農家へ周知を行いました。

【普及活動の成果】

実証ほでの結果、通常作の基肥一発肥料＋穂肥の施用で収量が 516kg/10a（慣行区 480kg/10a）と向上したことから、次年度の栽培暦に反映し、JA 管内全域での取組とすることとなりました。一方、麦跡での施肥改善の効果は判然としなかったことから、今後も改善方策の検討を継続していきます。

◎対象者の意見

基肥一発肥料体系でも穂肥の増収効果があることが分かりました。次作以降、水稲の生育を見ながら流し込み施肥など省力的な方法で穂肥を検討したいです。（生産者 N 氏）